

# MELDIA

# 漫画家 沖田×華



MELDIA寄贈レポート  
より豊かな社会生活に向けて  
メルディア杯メダル・  
カタログギフト・タオルを寄贈

18歳以降の学びを支える  
自立への自信を育む旭出学園の専攻科

どうしてうまくいかないんだろう、  
その問いを越えて  
——沖田×華さんが語る今

# 沖田 × 華さん

実体験をもとに描いた『毎日やらかしてます。』シリーズを始め、発達障がいのあるファンも多い漫画家の沖田×華さん。周囲の期待に応えようと思ってもなぜか空回ってしまう…そんな経験をしてきたからこそ伝えたい、今のメッセージを伺いました。



さん

## どうしてうまくいかないんだろう、その問いを越えて——沖田×華さんが語る今

「小学校の入学式の日から、怒られない目がなかったんです。そう振り返る沖田さん。宿題を忘れてしまう、授業中じっと座ってられない——子どもの『あるある』にも見える行動が、当時の学校では理解されず、先生から怒られることが多かったと言います。「静かにしていなさい」と言われても、それが理解できませんでした。静かにすることはできけれど、頭の中では常に色々なことを考えていたので、話を聞くということもできなくて。」

とくに大きかったのは、音への敏感さ。通学路にある高架線の音が痛いほど苦手で、電車が通り過ぎるまで動けないこともしばしば。そのため自分だけの「通れるルート」や「守れるルール」をつくり、子どもながらになんとか生活を整えようと工夫していました。

しかし80年代当時、発達障がいの概念はまだ一般的ではなく、忘れ物の多さや学習の偏りは、努力不足、落ち着きのなさ、と捉えられがちでした。

「みんなと同じようにできないのはなぜだろう。どうしたら怒られずに済むんだろうって、ずっと考えていました。」

やがて小学4年生の頃、学習障がいの疑いという言葉と出会います。とは

「なぜ私は怒られるの?」  
——幼少期に感じた違和感



# CONTENTS

VOL. 72

MELDIA  
2026 MAR.

03 漫画家 沖田×華さん

どうしてうまくいかないんだろう、その問いを越えて——沖田×華さんが語る今



07 MELDIA寄贈レポート

より豊かな社会生活に向けて  
メルディア杯メダル・  
カタログギフト・タオルを寄贈



10 JALサンライト

磨かれるのは技術だけじゃない  
——JALサンライトの現場で生まれる、自信と憧れ



12 「優しい気持ち」を広めたい。

いくつもの困難を乗り越え、愛を伝える yasu family

14 多機能型事業所 ITSUMO

「支えられる人」から「誰かを支える人」へ  
重度障がいでも、地域で「働く」を叶える場所



16 特性がプロとして輝く。

新しい農業モデルで描くソーシャルファームの未来



18 18歳以降の学びを支える

自立への自信を育む旭出学園の専攻科



20 おさんぽ DE 楽しむ!

空の仕事を手感するJAL SKY MUSEUM



22 発達ガイドブック

24 セサミストリートの絵本がスタート! VOL.5

ともだちひろば ジュリアのおはなし

26 「いざという時の備え」の車。手放す日を思いながら息子とのドライブを

水越けいこ M Size はじまり Again

28 「できる」と「得意」を可視化する

就労アセスメント「MWS」を活用した就職支援

31 プレゼント

いえ、得意な科目もあったことから本人のなかではまだ実感がなく、「LD(学習障がい)という英語の響きが少しかっこよく思えた」と苦笑いします。それでも、違和感と向き合う最初のきっかけになりました。

働きはじめて気づいた  
「自分だけが追いつけない感覚」



学生のうちは「周りと同じようにするために、自分にとっては不自然な努力をする」という形で過ごしてきたという沖田さん。しかし、22歳で正看護師となり、大きな病院へ就職したとき、沖田さんは初めて「これは性格の問題じゃない」と強く感じたと言います。

教わった手順をすぐに忘れてしまう、呼ばれても自分のことだと気づけない、



患者さんの顔を覚えづらい——。努力しても追いつけない場面が増え、「周りの人が当たり前にもっている力が自分には欠けている」と痛感しました。周囲に相談できず、孤立感が深まるなか、「どう生きていけばいいのかわからなくなつた」と言います。そこから、環境を変えるために働き方を見直し、自分が集中しやすい仕事や生活リズムを模索していくようになりました。

転職となったのは、東京に移り住んだ頃、インターネット上のコミュニティで「自閉スペクトラム」という言葉に出会ったこと。特徴をまとめたチェック項目を見た瞬間、「今まで普通だと思っていたことが全部この特性だったんだ」と腑に落ちたと話します。

「こだわりの強さ、空気を読むのが難し



いところ、自分のルールに沿って動いてしまうとところ：ずつと変わっている性格のせいだと思っていたものが、ようやく言葉になった感じでした。

特性と折り合いをつけるために  
「できる工夫」を積み重ねる



現在の沖田さんは、多くの連載や講演をこなすために、日々の中で工夫を重ねて特性と向き合っています。例えば、時間のずれを見越して動く。「日付や時間を間違えることが本当に多い

ので、約束には早く行くようにしています」と、1時間前に到着しても、落ち着いて整えるための準備と捉えているそうです。他に、対談の前には徹底的に相手を知る。「思ったことをそのまま口にしてしまい、相手を驚かせてしまう失敗も少なくありませんでした。だから事前にも相手の情報をなるべく調べます。何を言うと失礼か、どんな話題が好きか。お見合いみたいに(笑)」。そして、距離感を意識して関係を守る。相手との距離を一気に詰めすぎて衝突することもあったと言います。「仲良くしたいから勢いで近づきすぎてしまう。でも後で『あれは失礼だった』と知ることが多かったので、今は距離を置く工夫をしています」。

がついています。「モデルとする本人の了承を忘れて描いてしまうことがあるので、そこも気をつけるようになりました。相手に嫌な思いをさせてしまっていることに後から気づいたり、夫から言われて気づいたりということもあります。人間関係は一度壊れると戻せませんが、その気持ちに折り合いをつけるために失敗してきた経験を糧にしています」。

講演では、保護者に向けて「できないことへの心配は、本人は意外と深刻に悩んでいないことも多いと伝えます」と語ります。

「親の心配と、当事者の感覚には大きな差があることがある。その溝を少しでも埋めたいと思って話しています。それと、見えているもの全てがその子だと思わないでほしいです。見えている部分は



# MELDIA 2025メルディア杯

## NPO 法人東京都ID ボウリング連盟

2025年12月に開催されたメルディア杯。ストライクが出るとハイタッチで盛り上がる、笑顔の輪が循環する一日に密着しました。



MELDIA 寄贈レポート

at TOKYO PORT BOWL

## より豊かな社会生活に向けて メルディア杯メダル・カタログギフト・タオルを寄贈

一般財団法人メルディア 代表理事 小池 信三



メルディア杯には40名を超える選手にご参加いただき大変盛り上がり嬉しく思います。大会はハンデキャップマッチということもあり、全ての参加者に優勝の可能性があり見ている側も手に汗握る大会となりました。ボウリングは保護者のみなさまも含めて家族で楽しめる競技である点が素敵ですね。これからも財団メルディアでは知的障がいのある方の社会参加や余暇活動を応援していきます！

今大会の主催である、NPO 法人東京都IDボウリング連盟は2007年に設立。知的障がいのある方の生活において、日常的にスポーツを取り入れることを大切に活動しています。数ある競技の中でなぜボウリングなのか。連盟の事務局長である石飛さんはその意義について「ボウリングは一人でも練習ができる個人競技であり、ボウリング場という場所さえあれば活動ができるんです。それが大きいですね」と語ります。さらに、この競技特有の「分かりやすさ」も魅力の一つ。「ボールを投げてピンが倒れる。自分のしたアクションと結果が結びつく因果関係が非常に明快で、その場で喜びを実感できる分かりやすさがあります」と石飛さん。

連盟が何より大切にしているのは、トップアスリートを目指す人だけでなく、年齢や性別、技能や経験を問わず、誰もが楽しめる「開かれた門戸」であることです。どんな人でもボウリングを通じて輝ける場所、そして仲間と繋がる場所を作ること。そんな想いのもと、現在は定期的な練習会の開催や、自主開催の大会の運営などを行っています。

誰もがボウリングを通じて輝ける場所、そして仲間と繋がる場所

漫画家として歩む中で、沖田さんの元には多くの声が届くようになりました。「同級生から子どもが発達障がいだった」と上司が発達障がいだったと気づいたと報告をもらうこともあります。漫画を読んで「これだったんだ」と腑に落ちたと言われると、描き続けてよかったですと思います。

一方で、発達特性が「ファッション的」に扱われてしまう現状への疑問も抱いています。「わたしADHDだから特別」と、マイノリティをアピールするようなことを聞くようになってきたと感じていて、今はそれはなぜなのかを漫画で描きたいと考えています。

「生きづらさを抱える人へ 同じ景色を見てきたから言えること」



本人にとっての本当に「ごく一部です。その特性は、薬などで抑えることもできるかもしれないけれど、果たしてそれが本人にとって正解なのか。自分の特性とともに生きてきた私にとっては、ずっとそこにあるもの」という感覚なので、発達障がいというだけで全てを決め付けることはやめてほしいなと思います。

そして最後に、読者へのメッセージを頂きました。

「人と関わることがしんどい人は、本当に多いと思います。だからこそ、同じ趣味の人と出合える場所を持つといいと思います。撮り鉄でも、ゲームでも、ルー



ルがあつて安心できるコミュニティはたくさんあります。ひとつの場所が合わなくなっても、他の居場所があれば大丈夫。複数の自分の好き々を持つておく、心が折れそうときの逃げ道になり

1名様 PRESENT

沖田×華さんサイン入り本『毎日やらかしてます。アスペルガーで、漫画家で』(2012、ぶんか社)

詳しくはP.31

おきた ぼっか 沖田×華  
富山県出身の漫画家。自身の発達特性の気づきや生活の工夫、人との関わりで起きる「ずれ」を独自の視点で描き、講演活動も行う。経験に根ざした率直な語り多くの共感を集めている。  
<インフォメーション>  
『お別れホスピタル』『しもてく一家』など発売情報はXをチェック!  
<https://x.com/okita9393>  
『毎日やらかしてます。アスペルガーで、漫画家で』Kindle版  
<https://amzn.asia/d/919DnH1>



ます。

そして、自然の中でぼんやりするのもおすすめ。何も言わず、ただそこにいてくれるものの前では、心がすっと軽くなります。あなたのペースで、今日を過ごしてみてください。



大会は司会進行の理事  
紅林仁さんの挨拶からスタート



一般財団法人メルディア事務局長  
永野周平



東京都IDボウリング連盟理事  
森山康之さん



東京都IDボウリング連盟事務局長  
後藤邦夫さん

東京都IDボウリング連盟事務局長  
石飛了一さん

### 「メルディア杯」で生まれた 新たな一歩と、これからの展望

今大会は、メルディアが表彰品を支援し「メルディア杯」と称して開催されました。石飛さんは、「これまでは外部からの資金獲得が難しい面もありましたが、今回のような支援を受けられたことは、連盟にとって非常に大きな一歩となりました」と振り返ります。当日はメルディアの職員も競技に参加し、実際に選手たちの技術の高さや熱意を間近で体感しました。

連盟の今後の展望は、スタッフの若返りや増員に力を入れ、持続可能な組織運営を行うこと。特定の誰かに頼るのではなく、みんなで支え合う体制を整えることで、大会や練習会が「当たり前」にある環境を目指します。障がいの有無に関わらず共に楽しむ「ユニファイド練習会」を実施するなど活動の幅を広げている東京都IDボウリング連盟。石飛さんは、「学校を卒業した後も、体を動かす楽しさを忘れず、健康で豊かな生活を送るきっかけとなる場所をこれからも提供していきたいです」と、未来への決意を語ります。メルディアも、誰もが自分らしく生きられる社会を目指し、こうした活動を共に支えてまいります。



大会にはメルディアの職員も参加しました

### 職場とはまた違う、人とのコミュニケーションが取れる大切な居場所

会場では、選手のご家族からも話を伺いました。ボウリングが単なるスポーツ以上に、選手たちの生活を彩る大切な存在であることが伝わってきました。ボウリング歴12年を超える山口碧海選手のご家族は、「本人がとにかく楽しんでいてのが一番です」と話します。昨年3月に仕事を辞めてからは、職場とはまた違う、人とのコミュニケーションが取れる大切な居場所になっていくそうです。「これからも長く続けて交流を楽しんでほしい」と、温かく見守っています。

お父様の影響で約4年前に始めた寺島翼選手は、大会で新しい友達と会えることを何よりの楽しみにしています。「ボウリングをしている時の、普段とはまた違う生き生きとした表情がとても印象的です」とお母様は話します。

また、5歳から始めた半戸翔太選手は、最初はガーターにならないレーンを使っていましたが、ある時「自分でちゃんとやりたい」と、自ら補助を外すことを決めたそう。自分の意志で挑戦し、ボウリング場で出会う周りの方々にかわいがられながら成長していく姿は、ご家族にとっても大きな喜びとなっています。

### 選手たちからのメッセージ「もっと上手になりたい、みんなと笑いたい」

最後に、ボウリングに情熱を注ぐ選手たちに、今の想いを伺いました。津田玲美選手がボウリングを始めたきっかけは、少し意外なものでした。「先輩たちと遊んだ時に負けたのがすごく悔しくて始めたんです」。普段の練習は投げ放題のプランで15ゲーム以上も投げ込むという努力家です。この日は「もうちょっとできたはず」と悔しそうな表情も見せましたが、「これからは自分に合うボールをいろいろ試して、もっとスコアを伸ばしたいです」と熱く語ります。

半戸翔太選手は、ボウリングの魅力が「みんなが楽しんで投げられたら、それが一番嬉しい」と笑顔で話してくれました。自分の投球動画を見てフォームを研究するなど、向上心は人一倍です。そんな半戸選手の次の目標は、「2027年の障スポ（全国障害者スポーツ大会）で優勝すること」。他にも、スペシャルオリンピックスでコーチをするお父様のスコアを超える腕前になった柳澤選手、両手投げに取り組みスコア向上を狙う八木選手など、多くの選手がそれぞれの目標を胸に一投を投じていました。仲間とハイタッチをして喜び合い、次はもっと高いスコアを目指す。そんな一歩一歩の積み重ねが、選手たちの毎日を鮮やかに彩っています。

### トータルスコア1位 八木利郎選手(23歳)

「優勝できて本当に嬉しいです！ボウリングは中学1年生の時、お父さんの影響で始めました。今日の勝因は、一生懸命練習してきた『両手投げ』が上手くいったことだと思います。普段は週に1、2回、1回につき10ゲームくらい投げ込んでいます。今の自己ベストは220くらいですが、これから240という高い壁を超えられるようにもっと練習を頑張りたいです。応援してくれた皆さんに、胸を張って『1位になったよ！』と報告したいです」。

「2位という素晴らしい結果をいただけて感無量です。24歳から始めて、ボウリング歴は長くなりました。若い頃は全国



(上)八木利郎選手、下の(右)玉上栄一選手、(左)市来大和選手

## メルディア杯上位入賞者へ直撃!

### トータルスコア3位・ハイスコア賞 市来大和選手(24歳)

「社会人になってボウリングを始めて約5年になりますが、今日は悔しい部分もありましたが3位とハイスコア賞を同時にいただけてとても嬉しいです。憧れのプロ選手の真似をして『両手投げ』に変えてから、少しずつ手応えを感じるようになりました。週に1、2回、5ゲームほど集中して練習に励んでいます。今の自己ベストは288ですが、300を出すのが目標です。支えてくれる皆さんの期待に応えられるよう、これからも一投を大切に投げ続けたいです」。

### トータルスコア2位 玉上栄一選手(61歳)

「2位という素晴らしい結果をいただけて感無量です。24歳から始めて、ボウリング歴は長くなりました。若い頃は全国

ね。これからの目標は、アベレージ200。これからも永く楽しんでいきたいです」。



#### メルディア杯表彰内容

ハンディありトータルスコア1~6位へメダル兼カタログギフト  
ハンディありトータルスコア10位、20位、30位、  
男女別ハイスコア賞、プービー賞へメダル

#### メルディア杯参加賞内容

オリジナルタオル(筑波大学附属大塚特別支援学校  
高等部の生徒の皆さんの作業学習にて作成)



#### NPO法人東京都IDボウリング連盟

2007年設立。ボウリングを通じて知的障がいのある方の社会参加を支援し、練習会や大会を開催。ボウリングを通じて誰もが輝ける場を提供。会員や、連盟の活動をサポートするメンバーを募集中!  
<https://tokyoidbowling.jimdofree.com/>





# JALサンライト 磨かれる

## ——JALサンライトの現場で生まれる、自信

### 靴を磨く時間が、気持ちを整える シューシャイン Briller

19年春に入社。最初は別の業務を担当していましたが、自ら希望して当時新しい部門として立ち上



新しい仕事への挑戦から始まった靴磨き  
シューシャインBrillerで働く田丸さんは、JALグループ社員専用の靴磨きを担当しています。革靴だけでなく、スエードやスニーカーまで扱うのが特徴です。一番好きな作業は、山羊毛ブラシを使った最終仕上げ。「汚れていた靴が、最後にきれいになる瞬間がいいんです」と田丸さん。特に注意しているのは、明るい茶色の靴。汚れ落としのス皮ドが遅いとシミになりやすいため、一定のリズムを意識しています。

田丸さんは2019年春に入社。最初は別の業務を担当していましたが、自ら希望して当時新しい部門として立ち上



※鏡のように輝かせる技術



#### 株式会社JALサンライト

日本航空株式会社の特例子会社として1995年に設立。事務・総務業務に加え、靴磨きやカフェ事業などを展開し、「障がいのある社員が活躍できる環境づくりのもと、多様な人材が活躍する職場を実現しています。」  
<https://www.jalsunlight.co.jp/>



#### 田丸 晴香さん

2019年入社。2021年に立ち上げられた、JALグループ社員専用シューシャイン「Briller(ブリエ)」に初期の頃から勤務。

# のは技術だけじゃない

## と憧れ

日本航空株式会社の特例子会社・JALサンライト。現場では、仕事をきっかけに自信をつけ、技術を磨き、憧れられる存在へと成長していく社員たちがいます。カフェと靴磨き、それぞれの現場で働く知的障がいのある社員お二人とグループ長・荒野さんへお話を伺いました。

### 誰かの一日を支える、一杯を SKY CAFE Kilatto

一杯のコーヒーに心を込めて  
SKY CAFE Kilattoで働く久田さんの主な仕事は、コーヒーのドリップや飲み物をお渡しするカウンター業務です。「おいしいコーヒーを淹れることが一番好きです」と話す久田さん。ドリップの時間は、いつも集中して向き合う大切なひとときです。特に気を付けているのは、ドリッパーポットの回し方。「500円玉みたいな円を描くイメージで、速さをそろえるようにお湯を注いでいます。わずかな違いで味が変わるため、丁寧さを何より大切にしています。」



カフェでは、コーヒーの他、抹茶ラテやスープ、パン、ソフトクリーム、洋菓子なども提供しています。忙しい時間帯も多い中で、久田さんが



#### 久田 斐己さん

2021年入社。社内カフェ「SKY CAFE Kilatto(キラット)」勤務。ハンドドリップコーヒー大会「チャレンジコーヒーバリスト」でも優勝を取る。

「自分の淹れたコーヒーで喜んでもらえると、元気になるんです。これからもハンドドリップの腕を磨きながら頑張ります」



「ありがとう」が次の一歩になる  
仕事のやりがいを探ねると、久田さんは迷わず答えてくれました。「お客さまに「おしかった」「ありがとう」と言われると、とても嬉しいです。もつと上手になりたいと思います。「うまくいかないときや困ったときには、ジョブサポーターや先輩に相談できる環境があります。みなさん優しくしてくれるので、安心して仕事ができます」

「ありがとう」が次の一歩になる  
このことから挑戦したいことは、スープ作りやマシン操作、そしてさらにドリップの技術を高めること。「コーヒードリップは最初は難しいですが、練習するとできるようになって楽しいです。自分が淹れた一杯で誰かが喜んでくれることが、久田さんの原動力になっています。」

時間がかけて身につけた技術と誇り  
鏡面磨きの技術を身につけるまでには、約2年かかりました。「ワックスと水で、だんだん光ってきたときに、うまく仕上げられたなと感じます」日々どのくらいの靴磨きを行うか何うと、「多い時は1日に5足担当することもありますが」といいます。難しい靴をお預かりしたときは、周囲のスタッフに相談しながら進めています。

お客さまに靴をお返しした際の反応も、大きなやりがいです。「お願いしてよかった」と言われると、やってよかったと思います。今後の目標は、革の種類によってワックスが乗りにくい靴でも、よりきれいな鏡面磨きができるようになること。「靴がきれいだと、気持ちも前向きになります」靴磨きの仕事は、自分自身の気持ちも整えてくれると話してくれました。

大きく成長させる」と話します。実際に、仕事をきっかけに自信をつけ、技術を磨き、周囲から憧れられる存在へと変化していく社員の姿を、これまで何度も見してきました。「憧れが生まれ、その背中を追う後輩が育つ。そうした循環が、現場にはあります。」

今後は特例子会社の枠にとどまらず、業界のリーディングカンパニーとして、新しい価値を社会に示していくことを目標としています。障がいのある社員一人一人が、自分らしく働き、人生を歩み続けられる場所をつくる——。JALサンライトの挑戦は、これからも続いていきます。

仕事、人を育てる。憧れられる存在へ



東京事業部天王洲バイオニアグループ長 職場適応援助者 荒野 竜司さん



YouTubeやTikTokで総数20万人以上のフォロワーを持つ「yasu family」。4人家族の父・やすパパさんは重なり合う困難に直面しながらも、どう乗り越えていくかという前向きな視点を大切に、日々の発信を続けています。この活動の裏にある、温かい思いとご家族の成長の記録について、お話を伺いました。

**「発信してもいいんだ」**

SNSで広く動画を発信している「yasu family」。やすパパさんの家族は、長男の翔輝さん(重度知的障がい・自閉スペクトラム症)、長女の姫歌さん(中度知的障がい・自閉スペクトラム症)という2人のお子さんに障がいがあります。奥様も知的障がいがあり、やすパパさん自身も混合性不安抑うつ障害と重症筋無力症を抱えながら、家族を支えています。

やすパパさんがSNSでの発信を始めたのは2018年のTikTokからでした。当初、知的障がいや自閉症について発信する発想さえなかったといいます。しかし、翔輝さんと同世代かつ障がいのある男性の動画を見たときに、「発信していいんだと解き放たれた気持ちになりました」と語ります。様々な苦労や差別的な経験を経てきたやすパパさんにとって、「家族のことを知ってほしい、広めたい」という気持ちが強かったそう。

**無理やりではなく、家族のペースを大切に**

動画の発信を続ける中でやすパパさんが得た喜びは、「子どもの成長の先が見える」ことです。「親の心の安定って子育てにすごく大きく影響を与えると



うんです」。この経験から、今度は自分たちが発信することで、同じように不安を抱える誰かの「心の安定」を支えたいという思いが、発信を続ける理由となっています。やすパパさんがSNSを通じて届けたいのは、苦労や葛藤ではなく、「優しい気持ち」です。

発信においては、奥様は基本出演をNGとしているように、ご家族それぞれの気持ちを尊重し、負担なく続ける姿勢を大切にしています。「動画の収益は生活に直結しているものではありませんが、撮影は家族のペースを大切にしているので、投稿数は多くありません。頂いたコメントで子どもたちが嫌な思いをしないよう配慮し、撮影が楽しいと思っ

**環境によって、可能性は一気に広がる**

やすパパさんが日々家族と接する中で大切にしているのは「家族バランスを保つこと」。家族の誰かが不安定になると、それに引つ張られてしまうことも多いからです。「精神的に不安定になっている家族に対して全力で笑わせに行くのです。時には家族みんなです。優しく対応するようにしていた時よりも、なぜか効果があるんですよ」といいます。

そのような「前向き」な姿勢と発信活動は、お子さんたちの可能性を大きく広げました。昨年、姫歌さんが社会福祉協議会からの依頼でイラストを描くために作業所へ通い始めると、それまで午後からしか行かないこだわりがあった翔輝さんが「俺も行くよ」と突然言い出し、朝からフルタイムで通うことが可能に。

2年間ひきこもりだった姫歌さんも、家庭以外の場所で毎日絵を描くことができるようになったことは、やすパパさんにとっても嬉しい出来事でした。子どもたちの変化から、環境によって一気に可能性が広がることを改めて教えられたといいます。

また、YouTubeの撮影の影響で、翔輝さんは以前はオウム返しが多



かったのが、現在ではテーマを与えなくても会話の流れで自分の言葉で話せるように成長しています。姫歌さんも、声を出すのが難しい状態が長く続いていましたが、少しずつ声を出して話せるよ

て届けたいのは、お子さんたちが「頑張っているところ」です。その奮闘する姿を感じてもらい、「自分も頑張ろう」と思ってくれたら私達は嬉しいといいま

**「優しい気持ち」を広げるために**

yasu familyがSNSを通して

発信活動は、フォロワーとの温かい繋がりを生み出しています。中には、yasu familyの動画をきっかけに特別支援教育や保育の道を志した人もいます。また、一度は火災に

遭いながらも、フォロワーからの温かい応援や支援に支えられた経験もあり、これからも元気に過ごしている姿を発信し続けることが、彼らへの恩返しだと振り返りながらいます。

やすパパさんが願うのは、子どもたちの笑顔や奮闘する姿を通じて、「優しい気持ち」が広がること。「障がいを知りたいと思う気持ちから、優しい気持ちを広がり、世界が障がいへの偏見や差別のない世界になればと願っています」。

そして、障がいのあるお子さんを持つ方々へ「教科書は子どもです。子どもをよく観察していると障がいが見えてきます。何年も掛かりますが沢山苦労して沢山悩んで葛藤してぶつかり合いながら諦めずに奮闘してほしいです」と語ります。

**yasu family**  
やすパパさん、長男の翔輝さん、長女の姫歌さん、奥様の4人家族。出来ることを前向きに頑張る子どもたちの様子を発信し、多くのファンを持つ。

発売中/  
佐藤 靖高(やすパパ) (著)  
『限界ギリギリ家族』(KADOKAWA, 2024)

夫婦の出会い・浮気・家族崩壊・長男の脱走癖・長女の虐め・障がいの葛藤などSNSでは語られていない多くの経験が書籍に。  
<https://amzn.asia/d/OLxxDyp>  
TikTok  
<https://www.tiktok.com/@origami1969>  
YouTubeチャンネル  
[https://www.youtube.com/channel/UCz\\_09rWUQXitFITMvbgI4BQ](https://www.youtube.com/channel/UCz_09rWUQXitFITMvbgI4BQ)



(左)ITSUMO管理者・山田 清子さん  
(右)支援リーダー・上田 志保さん

「最初は牡蠣殻を3つ割ることから始め、慣れてきたら少しずつ個数を増やしての仕事を提案しました。」

「外での作業しか無理」と言われていた一人の男性スタッフの話です。集中が続き、座って作業することが難しいと考えられていましたが、上田さんは「彼にはもつとできることがある」と信じ、「KURA」での仕事を提案しました。

「変わったのは、地域の方たちの理解なんです」と上田さんは語ります。受け入れてもらうだけでなく、共に地域をつくる存在として、ITSUMOは

「変ったのは、地域の方たちの理解なんです」と上田さんは語ります。受け入れてもらうだけでなく、共に地域をつくる存在として、ITSUMOは

「無理だから」と諦めるのではなく、やるだけやってみよう」と。どんどん挑戦をしてほしいんです。

「職員が楽しくなければ、スタッフ(利用者)も楽しくないですから」。上田さんはそう話し、九十九里まで牡蠣殻を拾いに行った日のことを振り返ります。回収から洗浄、納品までの一連の工程を自分たちで行う。それがスタッフたちの働く経

「職員が楽しくなければ、スタッフ(利用者)も楽しくないですから」。上田さんはそう話し、九十九里まで牡蠣殻を拾いに行った日のことを振り返ります。回収から洗浄、納品までの一連の工程を自分たちで行う。それがスタッフたちの働く経

「職員が楽しくなければ、スタッフ(利用者)も楽しくないですから」。上田さんはそう話し、九十九里まで牡蠣殻を拾いに行った日のことを振り返ります。回収から洗浄、納品までの一連の工程を自分たちで行う。それがスタッフたちの働く経



多機能型事業所  
ITSUMO  
千葉県千葉市若葉区  
貝塚2-2-3  
Tel.043-310-7970  
https://b-e-s-t.jp/itsumo.html



「遠い道のりですけれど、一歩ずつやっていきたいです」と山田さん。「働く」を体験で終わらせず、対価のあるものにする。その姿勢がスタッフの誇りにつながっています。

「遠い道のりですけれど、一歩ずつやっていきたいです」と山田さん。「働く」を体験で終わらせず、対価のあるものにする。その姿勢がスタッフの誇りにつながっています。



多機能型事業所

ITSUMO

## 「支えられる人」から「誰かを支える人」へ 重度障がいでも、地域で「働く」を叶える場所

千葉県千葉市にある「ITSUMO(イツモ)」は、生活介護を中心に行う多機能型事業所。地域に根ざした活動を大切に、利用者も職員ものびのびと過ごせる、あたたかな雰囲気が特徴です。その取り組みについて、担当の方にお話を伺いました。

居場所をなくさないために  
ITSUMOをスタート

「ありのままに、そのままに、みんながつながり支え合える社会」を理念にITSUMOを運営するのは、株式会社ベストサポート。管理者の山田清子さんは、事業立ち上げの背景をこう語ります。

「小さな頃から関わってきた子どもたちが、大人になったときに居場所がなくならないようにしたかったんです。」

支援をされるだけでなく、  
自分たちも支える側になる

ITSUMOが大切にしているのは「大人の当たり前」を実践すること。その中心にあるのが「働く」という経験です。ここでは利用者を「スタッフ」、支援者を「職員」と呼びます。「支援されるだけでなく、自分たちも誰かを支える人になれる」という考えのもと、スタッフは四つのグループに分かれて仕事に取り組んでいます。



一つ目は、牡蠣殻を砕いて肥料を作る「KURA」。二つ目は、地域の子どもたちで賑わう「DAGASHI」。三つ目は、ランチや缶詰を提供販売する「CAFÉ」。そして四つ目は、地域の困りごとを解決する「GOYO」です。

「GOYOは、いわば便利屋さん。草取りが大変なお宅のお手伝いをしたり、ポスティングをしたり。地域の困りごとを引



「給料」を諦めないことで  
「大人の当たり前」を実現

現在、掲げている目標のひとつが「工賃」アップ。生活介護事業所でありながら、就労継続支援B型に近い水準を目指しています。

現在の平均工賃は月7,800円ほど。「遠い道のりですけれど、一歩ずつやっていきたいです」と山田さん。「働く」を体験で終わらせず、対価のあるものにする。その姿勢がスタッフの誇りにつながっています。

「遠い道のりですけれど、一歩ずつやっていきたいです」と山田さん。「働く」を体験で終わらせず、対価のあるものにする。その姿勢がスタッフの誇りにつながっています。